

三つの宝

芥川龍之介

青空文庫

一

森の中。三人の盗人^{ぬすびと}が宝を争っている。宝とは一飛びに千里飛ぶ長靴^{ながぐつ}、着れば姿の隠れるマントル、鉄でもまっ二つ^{ふた}に切れる剣^{けん}——ただしいずれも見たところは、古道具らしい物ばかりである。

第一の盗人 そのマントルをこつちへよこせ。

第二の盗人 余計^{よけい}な事を云うな。その剣こそこつちへよこせ。——おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人 この長靴はおれの物じゃないか？ 貴様こそおれの物を盗んだのだ。

第一の盗人 よしよし、ではこのマントルはおれが貰^{もら}って置こう。

第二の盗人 こん畜生^{ちくしょう}！ 貴様なぞに渡してたまるものか。

第一の盗人 よくもおれを撲^{なぐ}つたな。——おや、またおれの剣も盗んだな？

第三の盗人 何だ、このマントル泥坊め！

三人の者が大喧嘩^{おおげんか}になる。そこへ馬に跨^{またが}つた王子が一人、森の中の路を通りかかる。

王子 おいおい、お前たちは何をしているのだ？（馬から下りる）

第一の盗人 何、こいつが悪いのです。わたしの剣を盗んだ上、マントルさえよこせと云うものですから、――

第三の盗人 いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人 いえ、こいつ等は二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、――

第一の盗人 嘘をつけ！

第二の盗人 この大法螺吹きめ！
おほらふ

三人また喧嘩をしようとする。

王子 待て待て。たかが古いマントルや、穴のあいた長靴ぐらい、誰がとっても好いじゃないか？

第二の盗人 いえ、そうは行きません。このマントルは着たと思うと、姿の隠れるマントルなのです。

第一の盗人 どんなまた鉄の兜かぶとでも、この剣で切れば切れるのです。

第三の盗人 この長靴もはきさえすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子 なるほど、そう云う宝なら、喧嘩をするのももともな話だ。が、それならば欲張よくばらずに、一つずつ分ければ好いいじゃないか？

第二の盗人 そんな事をしてごらんなさい。わたしの首はいつ何時なんどき、あの剣に切られるかわかりはしません。

第一の盗人 いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られれば、何を盗まれるか知れますまい。

第二の盗人 いえ、何を盗んだ所が、あの長靴をはかなければ、思うようには逃げられなわい訣けです。

王子 それもなるほど一理窟ひとりくつだな。では物は相談だが、わたしにみんな売ってくれないか？ そうすれば心配も入らないはずだから。

第一の盗人 どうだい、この殿様に売ってしまうのは？

第三の盗人 なるほど、それも好いいかも知れない。

第二の盗人 ただ値段次第だな。

王子 値段は——そうだ。そのマントルの代りには、この赤いマントルをやろう、これには刺繡ぬいとりの縁ふちもついている。それからその長靴の代りには、この宝石のはいった靴をや

ろう。この黄金細工の剣をやれば、その剣をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盗人 わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きましょう。

第一の盗人と第三の盗人 わたしたちも申し分はありません。

王子 そうか。では取り換えて貰おう。

王子はマントル、剣、長靴等を取り換えた後、また馬の上に跨りながら、森の中の路を
行きかける。

王子 この先に宿屋はないか？

第一の盗人 森の外へ出さえすれば「黄金の角笛」という宿屋があります。では御大事にいらつしやい。

王子 そうか。ではさようなら。（去る）

第三の盗人 うまい商売をしたな。おれはあの長靴が、こんな靴になろうとは思わなかった。見ろ。止め金には金剛石がついている。

第二の盗人 おれのマントルも立派な物じゃないか？ これをこう着た所は、殿様のように見えるだろう。

第一の盗人 この剣も大した物だぜ。何しろ柄も鞘も黄金だからな。——しかしあやすやす欺だまされるとは、あの王子も大莫迦おおばかじゃないか？

第二の盗人 しつ！ 壁に耳あり、徳利とくりにも口だ。まあ、どこかへ行つて一杯やろう。

三人の盗人は嘲笑あざわらいながら、王子とは反対の路へ行つてしまふ。

二

「黄金の角笛きん つのぶえ」と云う宿屋の酒場。酒場の隅すみには王子がパンを嚙かじっている。王子の

ほかにも客が七八人、——これは皆村の農夫らしい。

宿屋の主人 いよいよ王女の御婚礼ごこんれいがあるそうだね。

第一の農夫 そう云う話だ。なんでも御婿おむこになる人は、黒ん坊の王様だと云うじゃないか？

第二の農夫 しかし王女はあの王様が大嫌いだと云う噂うわさだぜ。

第一の農夫 嫌いなればお止しなされば好いのに。

主人 ところがその黒ん坊の王様は、三つの宝ものを持っている。第一が千里飛べる長ながぐ

靴、第二が鉄さえ切れる剣、第三が姿の隠れるマントル、——それを皆獻上すると

云うものだから、欲の深いこの国の王様は、王女をやるとおっしゃったのだそう。

第二の農夫 御可哀おかわいそうなのは王女御一人だな。

第一の農夫 誰か王女をお助け申すものはないだろうか？

主人 いや、いろいろの国の王子の中には、そう云う人もあるそうだが、何分あの黒ん坊の王様にはかなわないから、みんな指を啣くわえているのだとき。

第二の農夫 おまけに欲の深い王様は、王女を人に盗まれないように、竜りゆうの番人を置いてあるそう。

主人 何、竜じゃない、兵隊だそう。

第一の農夫 わたしが魔法まほうでも知っていれば、まっ先に御助け申すのだが、——

主人 当り前さ、わたしも魔法を知っていれば、お前さんなどに任せて置きはしない。

(一同笑い出す)

王子 (突然一同の中へ飛び出しながら) よし心配するな！ きつとわたしが助けて見せる。

一同 (驚いたように) あなたが

王子 そうだ、黒ん坊の王などは何人でも来い。（腕組をしたまま、一同を見まわす）わたしは片っ端はしから退治たいじして見せる。

主人 ですがあの王様には、三つの宝があるそうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、

王子 鉄でも切れる剣か？ そんな物はわたしも持っている。この長靴を見ろ。この剣を見ろ。この古いマントルを見ろ。黒ん坊の王が持っているのと、寸分すんぶんも違わない宝ばかりだ。

一同 （再び驚いたように）その靴が その剣が そのマントルが

主人 （疑わしように）しかしその長靴には、穴があいているじやありませんか？

王子 それは穴があいている。が、穴はあいていても、一飛びに千里飛ばれるのだ。

主人 ほんとうですか？

王子 （憐あわれむように）お前には嘘うそだと思われるかも知れない。よし、それならば飛んで見

せる。入口の戸をあけて置いてくれ。好いいか。飛び上ったと思うと見えなくなるぞ。

主人 その前に御勘定おかんじようを頂きましょうか？

王子 何、すぐに帰って来る。土産みやげには何を持って来てやろう。イタリヤの柘榴ざくろか、イス

パニアの真桑瓜まくわうりか、それともずっと遠いアラビアの無花果いちじくか？

主人 御土産おみやげならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子 では飛ぶぞ。一、二、三！

王子は勢いきおいよく飛び上る。が、戸口へも届とどかない内に、どたりと尻餅しりもちをついてしま
う。

一同 どつと笑い立てる。

主人 こんな事だろうと思つたよ。

第一の農夫 千里どころか、二三間も飛ばなかつたぜ。

第二の農夫 何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、また千里飛び返つたから、も
との所へ来てしまつたのだろう。

第一の農夫 冗談じやうだんじゃない。そんな莫迦ばかな事があるものか。

一同 大笑いになる。王子はすすごく起き上りながら、酒場の外へ行こうとする。

主人 もしも御勘定を置いて行つて下さい。

王子 無言のまま、金かねを投げる。

第二の農夫 御土産は？

王子（劍の柄へ手をかける）何だと？

第二の農夫（尻ごみしながら）いえ、何とも云いはしません。（独り語のように）劍だけは首くらい斬れるかも知れない。

主人（なだめるように）まあ、あなたなどは御年若なものですから、一先御父様の御国へお帰りなさい。いくらあなたが騒いで見たところが、とても黒ん坊の王様にはかないはしません。とかく人間と云う者は、何でも身のほどを忘れないように憤み深くするのが上分別です。

一同 そうなさい。そうなさい。悪い事は云いはしません。

王子 わたしは何でも、——何でも出来ると思つたのに、（突然涙を落す）お前たちにも恥ずかしい（顔を隠しながら）ああ、このまま消えてもしまいたいようだ。

第一の農夫 そのマントルを着て御覧なさい。そうすれば消えるかも知れません。

王子 畜生！（じだんだを踏む）よし、いくらでも莫迦にしろ。わたしはきつと黒ん坊の王から可哀そうな王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかったが、まだ劍もある。マントルも、——（一生懸命に）いや、空手でも助けて見せる。その時に後悔しないようにしろ。（氣違ひのように酒場を飛び出してしまふ。）

主人 困ったものだ、黒ん坊の王様に殺されなければいいが、――

三

王城の庭。薔薇の花の中に噴水が上っている。始は誰もいない。しばらくの後、マントルを着た王子が出て来る。

王子 やはりこのマントルは着たと思うと、たちまち姿が隠れると見える。わたしは城の門をはいつてから、兵卒にも遇えば腰元にも遇った。が、誰も咎めたものはない。このマントルさえ着ていれば、この薔薇を吹いている風のように、王女の部屋へもはいれるだろう。――おや、あそこへ歩いて来たのは、噂に聞いた王女じゃないか？ どこかへ一時身を隠してから、――何、そんな必要はない、わたしはここに立っていても、王女の眼には見えないはずだ。

王女は噴水の縁へ来ると、悲しそうにため息をする。

王女 わたしは何と云う不仕合せなのだろう。もう一週間もたたない内に、あの憎らしい黒ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行ってしまふ。

獅子や鰐わにのいるアフリカへ、（その芝しばの上に坐りながら）わたしはいつまでもこの城にいたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いていたい。……

王子 何と云う美しい王女だろう。わたしはたとい命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女 （驚いたように王子を見ながら）誰です、あなたは？

王子 （独り語ごとのように）しまった！ 声を出したのは悪かったのだ！

王女 声を出したのが悪い？ 氣違きちがいかしら？ あんな可愛い顔をしているけれども、――

王子 顔？ あなたにはわたしの顔が見えるのですか？

王女 見えますわ。まあ、何を不思議ふしぎそうに考えていらつしやるの？

王子 このマントルも見えますか？

王女 ええ、ずいぶん古いマントルじゃありませんか？

王子 （落胆らくたんしたように）わたしの姿は見えないはずなのですがね。

王女 （驚いたように）どうして？

王子 これは一度着さえすれば、姿が隠れるマントルなのです。

王女 それはあの黒ん坊の王のマントルでしょう。

王子 いえ、これもそうなのです。

王女 だつて姿が隠れないじやありませんか？

王子 兵卒へいそつや腰こしもと一元あに遇つた時は、確かに姿が隠れたのですがね。その証しょうこ拠こには誰に

遇つても、咎とがめられた事がなかつたのですから。

王女 （笑い出す）それはそのはずですね。そんな古いマントルを着ていらつしやれば下げ

男なんか何かと思われますもの。

王子 下男！（落胆したように坐つてしまふ）やはりこの長靴と同じ事だ。

王女 その長靴もどうかしましたの？

王子 これも千里飛ぶ長靴なのです。

王女 黒ん坊の王の長靴のように？

王子 ええ、——ところがこの間飛あいだんで見たら、たった二三間も飛べないのです。御覧な

さい。まだ剣けんもあります。これは鉄でも切れるはずなのですが、——

王女 何か切つて御覧になつて？

王子 いえ、黒ん坊の王の首を斬きるまでは、何も斬らないつもりなのです。

王女 あら、あなたは黒ん坊の王と、腕競うでくらべをなさりにいらしたの？

王子 いえ、腕競べなどに来たのじやありません。あなたを助けに来たのです。

王女 ほんとうに？

王子 ほんとうです。

王女 まあ、嬉しい！

突然黒ん坊の王が現れる。王子と王女とはびっくりする。

黒ん坊の王 今日こんにちは。わたしは今アフリカから、一飛びに飛んで来たのです。どうです、

わたしの長靴の力は？

王女 （冷淡に）ではもう一度アフリカへ行っていらつしやい。

王 いや、今日きょうはあなたと一しよに、ゆっくり御話がしたいのです。（王子を見る）誰で

すか、その下男は？

王子 下男？（腹立たしそうに立ち上る）わたしは王子です。王女を助けに来た王子です。

わたしがここにいる限りは、指一本も王女にはささせません。

王 （わざと叮嚀ていねいに）わたしは三つの宝を持っています。あなたはそれを知っていますか？

王子 剣と長靴とマントルですか？ なるほどわたしの長靴は一町も飛ぶ事は出来ません。しかし王女と一しよならば、この長靴をはいていても、千里や二千里は驚きません。またこのマントルを御覧なさい。わたしが下男と思われたため、王女の前へも来られたのは、やはりマントルのおかげです。それでも王子の姿だけは、隠す事が出来たじやありませんか？

王 (嘲笑う) ^{あざわら}生意気な！ わたしのマントルの力を見るが好い。(マントルを着る。同時に消え失せる)

王女 (手を打ちながら) ああ、もう消えてしまいました。わたしはあの人が消えてしまつと、ほんとうに嬉しくてたまりませんわ。

王子 ああ云うマントルも便利ですね。ちやうどわたしたちのために出来ているようです。王 (突然また現われる。忌々し^{いまいま}そうに) そうです。あなた方のために出来ているようなものです。わたしには役にも何にもたたない。(マントルを投げ捨てる) しかしわたしは剣を持っている。(急に王子を睨^{にら}みながら) あなたはわたしの幸福を奪うものだ。さあ尋常に勝負をしよう。わたしの剣は鉄でも切れる。あなたの首位は何でもない。

(剣を抜く)

王女 （立ち上るが早い、王子をかばう）鉄でも切れる剣ならば、わたしの胸も突けるでしょう。さあ、一突きに突いて御覧なさい。

王 （尻ごみをしながら）いや、あなたは斬れません。

王女 （嘲るように）まあ、この胸も突けないのですか？ 鉄でも斬れるとおっしゃった癖に！

王子 お待ちなさい。（王女を押し止めながら）王の云う事はもつともです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなければなりません。（王に）さあ、すぐに勝負をしよう。（剣を抜く）

王 年の若いのに感心な男だ。好いか？ わたしの剣にさわれば命はないぞ。

王と王子と剣を打ち合わせる。するとたちまち王の剣は、杖か何か切るように、王子の剣を切ってしまう。

王 どうだ？

王子 剣は切られたのに違いはない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑っている。

王 ではまだ勝負を続ける気か？

王子 あたり前だ。さあ、来い。

王 もう勝負などはしないでも好い。(急に剣を投げ捨てる)勝ったのはあなただ。わたしの剣などは何にもならない。

王子 (不思議そうに王を見る) なぜ？

王 なぜ？ わたしはあなたを殺した所が、王女にはいよいよ憎にくまれるだけだ。あなたにはそれがわからないのか？

王子 いや、わたしにはわかつている。ただあなたにはそんな事も、わかつていなそうな気がしたから。

王 (考えに沈みながら) わたしには三つの宝があれば、王女も貰えると思っていた。が、それは間違いだったらしい。

王子 (王の肩に手をかけながら) わたしも三つの宝があれば、王女を助けられると思っていた。が、それも間違いだったらしい。

王 そうだ。我々は二人とも間違っていたのだ。(王子の手を取る)さあ、綺麗きれに伸直しっぺいをしましょう。わたしの失礼しつれいは赦ゆるして下さい。

王子 わたしの失礼も赦して下さい。今になって見ればわたしが勝ったか、あなたが勝ったかわからないようです。

王 いや、あなたはわたしに勝った。わたしはわたし自身に勝ったのです。（王女に）わたしはアフリカへ帰ります。どうか御安心なすって下さい。王子の剣は鉄を切る代りに、鉄よりもつと堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御婚礼^{ごこんれい}のために、この剣と長靴と、それからあのマントルと、三つの宝をさし上げましょう。もうこの三つの宝があれば、あなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思いますが、もしまた何か悪いやつがあつたら、わたしの国へ知らせして下さい。わたしはいつでもアフリカから、百万の黒ん坊の騎兵^{きへい}と一しよに、あなた方の敵を征伐^{せいぱつ}に行きます。（悲しそうに）わたしはあなたを迎えるために、アフリカの都のまん中に、大理石の御殿を建てて置きました。その御殿のまわりには、一面の蓮^{はす}の花が咲いているのです。（王子に）どうかあなたはこの長靴をはいたら、時々遊びに来て下さい。

王子 きつと御馳走^{ごちそう}になりに行きます。

王女 （黒ん坊の王の胸に、薔薇^{ばら}の花をさしてやりながら）わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優しい方^{やさ}だとは、夢にも知らずにいたのです。どうかかにんして下さい。ほんとうにわたしはすまない事をしました。（王の胸にすがりながら、子供のように泣き始める）

王（王女の髪を撫でながら）有難う。よくそう云ってくれました。わたしも悪魔ではありません。悪魔も同様な黒ん坊の王は御伽噺にあるだけです。（王子に）そうじゃありませんか？

王子　そうです。（見物に向いながら）皆さん！　我々三人は目がさめました。悪魔のような黒ん坊の王や、三つの宝を持っている王子は、御伽噺にあるだけなのです。我々は今目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでいる訣には行きません。我々の前には霧の奥から、もっと広い世界が浮んで来ます。我々はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きましょう。もっと広い世界！　もっと醜い、もっと美しい、——もっと大きい御伽噺の世界！　その世界に我々を待っているものは、苦しみかたは楽しみか、我々は何も知りません。ただ我々はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のように、進んで行く事を知っているだけです。

（大正十一年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三つの宝

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>